アルタイ系具格接辞 *-ǰi の後裔（前編）

近　藤　健　二

ツングース系、モンゴル系、トルコ系諸言語をまとめて一般にアルタイ語あるいはアルタイ諸語と呼ぶ。三つの系統の言語をこのように総称するのは、もちろんこれらの言語が互いに似ているからである。しかし、その類似性、というよりその近似性は、はたしてアルタイ諸語が同一祖語から分岐したことによるのか。それとも、それは言語接触の反映なのか。この点に関して、アルタイ語学に携わる者の意見は一致していない。「アルタイ論者」はアルタイ祖語の存在を固く信じ、「非アルタイ論者」はそれを強く否定する。

ツングース系、モンゴル系、トルコ系諸言語が一つの系統樹を形成する言語群であろうとあるまいと、それらの間に観察される文法組織の似通いはその中核部分にまで及んでいる。たとえば名詞や代名詞の格組織は、同じ一つから派生した三つであると確信させるほどに似ている。しかし、細部はいろいろと異なっている。たとえば具格接辞の祖形として想定される *-ǰi は、ツングース諸語ではほとんど昔のままに保持されているが、モンゴル諸語とトルコ諸語では完全に失われるか、原形をとどめないほどに大きな変化をこうむっている。

本稿で取り上げようとするのは、まさにこの *-ǰi である。ここでは、*-ǰi が具格接辞として存在するか、あるいは消失したことを論じようとするのではない。問題とするのは、*-ǰi の歴史的発展にかかわる諸事実である。*-ǰi は、アルタイ語のとりわけ周辺部において著しい発達を遂げた。それはモンゴル語やトルコ語で対格接辞となったが、朝鮮語では主格接辞となった。日本語では、古代の主格接辞「い」となり、また動詞の連用形を構成する接辞となった。アイヌ語では、人称代名詞や名詞所属形の構成要素にさえなった。これらのことはすべて、過去の研究の射程外にあった事柄である。

１．具格接辞から副詞化接辞へ

具格接辞 *-ǰi に関してもっとも保守的であったのはツングース諸語である。ツングース諸語の大部分、すなわちソロン語、ネギタル語、ウデヘ語、オロチ語、ナーナイ語、オルチャ語、ウイルタ語では、現在も具格接辞は-ǰi である。またエウェン語とエウェンキー語でも音声的環境に応じてそれぞれ-č、-t などが現れるものの、具格接辞の主たる形

態は-ji である。一方、満州語では音変化の結果、具格接辞は-i となった。ちなみに、この-i は suhe-i「斧で」のように道具・手段を表したり、mujilen-i「心をこめて」、eradeken-i「早めに」、geren-i「みんなで」のように様態を表したりするだけでなく、juwe jugûn-i afame「両路より進入し」のように経由を表すこともある。[1]

モンゴル諸語とトルコ諸語では、ツングース諸語の場合と事情が大きく異なる。いずれにおいても具格接辞の *-ji は失われている。それに代わって、たとえばトルコ語では ile/-(y)le/-(y)la が具格接辞として、あるいは具格助詞として用いられるようになった。しかしこれらは、*-ji と無関係に成立したのではあるまい。以下に述べるように、それらは具格接辞-i（＜ *-ji）に別の接辞が添加されたものにちがいない。

トルコ語の ile は、i と le が合わさったものであろう。そして、i は *-ji に溯ることができる。現在、トルコ語に沿格と呼びうる格は存在しないが、ツングース諸語のいくつかには-li あるいは-lī という沿格接辞がある。古代日本語の沿格助詞「ゆり」（＞「より」）は沿格助詞「ゆ」に「り」が付加されたものであるが、この「り」はツングース諸語の-li/-lī と同源である。なお、トルコ語の-(y)le/-(y)la は、接辞と接辞が重なってできた助詞あるいは後置詞 ile がふたたび接辞化したものと考えられる。

モンゴル語に関しても、具格接辞がかつて *-ji であったことをうかがわせる事実がある。モンゴル口語（ハルハ方言）の具格接辞は-ār/-ör/-ēr であるが、モンゴル語文語には-bār/-bēr のほか、古態としての-ɢar、さらに下に例示するように-i を含む-iyar/-iyer という具格接辞がある。この-iyar/-iyer は "-i ＋-ɢar" に由来するものではあるまいか。

（１）Senggüm・・・Ong　gan-dur　tede'ēr　　üges　　Sayiqan-töde'n-*iyer*
　　センゲムは　　王　汗　に　それらの　言葉を　サイカン・トデエン によって
　　ügülejü　　ilejü'ü̱i̱　（『元朝秘史』[2] §167）
　　言い　　送った

-i がモンゴル語の古い具格接辞であったことを傍証するために、上とは異なる種類の例をあげておこう。

（２）tuluɢ　　ima'ār-*i*　　bolju　　bö'ed　（『元朝秘史』§167）
　　杖柱が　彼によって　なって　いて

この例で問題となるのは、ima'ār-i の-i である。人称代名詞の３人称単数具格形、すなわち「彼によって」「彼女によって」を意味する形態は、文語では一般 imabār あるいは ima'ār である。とすれば、これに付された-i はいったい何物なのか。小沢重男（1985：324）は、この-i を「指定の-i」ではないかとしたうえで、ima'ār-i を「他ならぬ彼を以て」ぐらいに訳せようと述べている。そして、（２）のモンゴル語文を「杖とも、柱と

も彼を（以て）して」と解釈するために、本文の動詞が bolǰu「なって」ではなく bolGaǰu「なして」であってほしいところである、と述べている。

筆者はこの説明に賛成しない。ima'ār-i は、具格接辞を二つ重ねた "ima ＋-Gar ＋-i" に由来するものと見たい。そしてもちろん、bolǰu「なって」はこのままでよい。bolGaǰu「なして」であってはならないのである。なぜなら、tuluG「杖柱」が文の主語だからである。（２）のいわんとする意味は、「たよるべき杖柱が彼からできていて」ということ、つまり「彼が頼るべき杖柱であり」ということであろう。

以上のように、トルコ語やモンゴル語では合成された具格接辞あるいは具格助詞の中に *-ji の残滓をわずかに認めることができるが、たとえば朝鮮語ではもはや具格接辞、具格助詞といえないものの中に *-ji の後裔をはっきり見ることができる。朝鮮語では、*-ji に由来する-i が副詞化接辞となったのである。なるほど、具各接辞も具格助詞も、あるいはまた副詞化接辞も、副詞でないものに副詞的機能を担わせるものである。しかし具格接辞・具格助詞が一般に名詞にに付加されるのに対し、副詞化接辞は一般に形容詞あるいは形容詞語幹に付加される。朝鮮語で-i が副詞化接辞になったというのは、-i がまさに形容詞語幹に付くようになったということ、もう少し厳密にいうと、形容詞語幹たりうるものにしか-i が付かなくなったということである。現代朝鮮語において-i は pparuw-da「速い」＞ ppal-li「速く」、čojo: η-hada「静かだ」＞čojo: η-hi「静かに」のように多くの形容詞を副詞に変換することができるが、-i のこの機能はすでにもっとも古い朝鮮語の文献において確立している。

（３）月置　　八切伊爾　　數於将軍將来戸波衣　（彗星歌[3]）

tʌltu　　pʌčĭl-*i*　　hjəljəlpaəj

月日を　　速く　　数え行くからには

ところで、-i に代わって朝鮮語の具格接辞となったのは-ɯro/-ro である。-ro はもともと沿格接辞であったろう。これは、ツングース諸語の沿格接辞-li、古代日本語の沿格助詞「ゆり」の「り」、さらにはトルコ語の具格接辞-(y)le/-(y)la の-le/-la と比較される。問題は、-ɯro の-ɯ である。これは何に由来するものなのか。-ɯ は現代朝鮮語では子音連続を避けるための役目を担っているが、もともとそういうもとして生まれたものであろうか。仮にそうでないとすれば、トルコ語の具格助詞 ile の i と同様に、具格接辞 *-ji に溯るものであるのかもしれない。

２．動詞連用形の起源

日本語の動詞連用形は、動詞語幹に具格接辞の-i、正確にいえば具格接辞に由来する-i が

付いて形成されたものである。このことを、ここでは朝鮮語やツングース諸語などの用法と比較しながら論じようとする。しかしまず、日本語における動詞活用の起源を説いた大野晋（1953）を引用することから考察をはじめる。

> 連用形はすべて語幹に-i が接續して成立したものと考へる。四段、カ変いづれも連用形はイ列甲類であるがそれは子音終止の語幹に i が接して成立する。上二段、下二段、上一段では ɨ、ə、i が現れるがそれは、語幹の母音 ö、u（上二段） a（下二段） i（上一段）に i が接續して成立すること未然形に見た通りである。（52−53頁）

連用形の成立に関するこの説明は至極簡潔である。ここで大野のいわんとする意味を完全に理解するために、大野晋（1982：180）から古代日本語における連用形の具体例を引用しておこう。

	ラ変（有）	四段（咲）	ナ変（去）	サ変（為）	カ変（来）	上ニ（起）	上ニ（尽）	下ニ（開）	上一（見）
奈良朝の形	ari	saki	ini	si	ki	ökï	tukï	akɛ	mi
推定の古形	ar-i	sak-i	in-i	s-i	k-i	ökö-i	tuku-i	aka-i	mi-i

約30年の期間を経た後も、大野の主張はほとんど変わっていない。唯一の変化は、下ニ段の語末母音が ə から ɛ に変えられたことである。周知のとおり、奈良朝日本語のキヒミ（イ列）、ケヘメ（エ列）、コソトノヨロモ（オ列）に母音のちがいによる甲乙の区別があり、甲類の母音は i、e、o で表され、乙類の母音は ï、ë、ö で表されるのが普通である。この意味において、大野がエ列乙類の母音を ə あるいは ɛ としたのは「普通ではない」けれども、これは大した問題ではない。なぜなら音価に甲乙の区別があったことは知られていても、甲乙の実際の音価、とくに乙類のそれはよく分からないからである。

動詞語幹に-i が付いて連用形が成立したという考えは、動詞語幹の何たるかを度外視すれば、基本的に正しかろう。語幹が子音で終わる動詞の場合、連用形の語末はすべて-i である[4]。また語幹が母音で終わる動詞の場合も、-i と先行母音との結合によって-i（＜-ö ＋ i/-u ＋-i）、-ë（＜-a ＋-i）、-i（＜-i ＋-i）になったと想定すれば、その本来の語末は-i であったということになる。問題は-i の正体である。-i はいったい何物なのか。このことに関して、大野晋（1953）は次のように述べている。

> そして今日いふ動詞の活用なるものは、起源に溯つて考察するならば単なる接續のための語形変化であると見ることは出来ず、終止形の如く動詞の熟合したものがあり、連體形の如く助詞の附属したものがあり、命令形の如く間投助詞の熟合し又は附属したものが存在する。これらの事實は動詞の活用と詞辭の論との関係について種々の示唆を與へるものである。それでは未然形に

於ける a、ö、i 連用形に於ける i は何であるかが問われるが、私は未だそれを何であると斷定することが出来ない。未然形に於ける a（その交替形 ö）は、恐らく、つづく形（切れない形）であり、連用形に於ける i は、恐らく切れる形であつたのではあるまいかと推測するがなほ考究すべき問題であると思ふ。已然形 ai、urai に於ける ai は未然形に i が附属して成立した形であるが、これにかん關してもなほ後日を期したい。（55頁）

このように、連用形は「切れる形」であったのではないかという。後に大野晋（1982）は、「切れる形」を「事」を意味するものといい換えて、-i の起源を以下のように論じている。

もし、ラ変・四段・ナ変・カ変・サ変までの語幹の部分が子音で終わることを容認し、上ニ・下ニ・上一の語幹の部分が母音で終わることを容認するならば、いわゆる連用形は、語幹に i なる接辞がつくことによって成立したと認めることによって、統一ある解釈が出来る。元来、この連用形は、そのまま名詞形ともなり、また、中止形ともなる。してみるとこの i なる接辞は、そうした名詞語尾であり、また、終止も為しうる形であったのではないか。日本語と同系統の言語という蓋然性が次第に高められている朝鮮語で、「事」を表わす il、また、「有り」の意味の it という二つの語があるのは、この日本語の連用形に現れてくる i と無関係であろうか。筆者は必ずしも無関係であると言えないように感じている。連用形の i は、そういう「事」を意味し、また「有り」を意味するとするとき、極めてよく理解出来るのである。（180頁）

ここで大野以外の国語学者が同じ問題をどうとらえているかについて述べておきたい。山口佳紀（1985）は、大野晋（1953）、阪倉篤義（1961）、北原保雄（1970）、馬淵和夫（1975）、川端善明（1978・1979）など動詞活用の起源にかかわる過去の研究を概説したうえで各活用の成立を説いているが、連用形に関するその所説は大野のそれと根本的にはちがわない。しかし、山口が未然形を「情態言」（すなわち動作性より情態性の形態）ととらえる阪倉の見方にならって、また動詞活用の根本的分類を「被覆形」と「露出形」[5]との対立に求める馬淵の考えを取り入れて連用形の成立を論じているところは大野と明らかに異なっている。山口はまず四段活用の連用形について次のようにいう。

＜連用形＞は、saki$_1$のごとく、～i$_1$の形をとるが、未然形が被覆形であるのに対して、連用形は露出形である。従って、四段活用における未然形と連用形との関係は、

サカ（ユ）（栄）―サキ（幸）
ワカ（ル）（分）―ワキ（腋）
イサ（ゴ）（砂）―イシ（石）
ハサ（ム）（挟）―ハシ（箸）
タカ（シ）（高）―タキ（丈）

アカ（フ）（贖）―アキ（商）

などの関係と全く平行的なものとしてとらえられる。すなわち、saka―saki$_1$の関係は、a―i$_1$間の異価的母音交替によって、被覆形・露出形の転換が行われたものと見ることができる。（331頁）

引用文中の saki$_1$というのはイ列甲類の音、すなわち一般に-i と表される音のことである。ここで山口は、未然形の-a が連用形では-i になると述べているにすぎない。しかし、二段活用の連用形について次のようにいっている。

＜連用形＞は、露出形であり、akai ＞ ake$_2$・tukui ＞ tuki$_2$・oko$_2$i ＞ oki$_2$のごとく、情態言に独立化の接尾辞 i が接して成った形であろう。これについては、すでに種々説かれており、特に付け加えるべき点はない。（337頁）

ここで山口が-i$_2$、-e$_2$、-o$_2$としているのは乙類の音、すなわち一般に ï、ë、ö と表される音のことである。また山口が「これについてはすでに種種説かれており、特に、付け加えるべき点はない」といっているのは、連用形を「情態言に独立化の接尾辞 i が接して成った形」であると見なすのが国語学のいわば通説であるということなのであろう。

ところで、カ変動詞とサ変動詞の連用形に関する山口の見方は大野のそれと大きくちがっている。それらについて山口は以下のように述べている。

カ変は、ク（来）の一語で、

コ・キ・ク・クル・クレ・コ

と活用する。ところで、このうち連用形は、古くキ（ki$_1$）ではなくて、コ（ko$_2$）だったのではないかと思われる。なぜならば、一般に禁止のナ～ソの間には、連用形が現れるが、クの場合はナ゜コソという。また、過去の助動詞キは、連用形から接続するのが普通であるが、クの場合は、コ゜シ・コ゜シカという言い方になる。なお、命令形はの連用形の転用であるという考え方をここで応用すれば、命令形がコであるのは、連用形がコであったことの証跡であろう。さらに、「安の河許牟可比立ちて」（万一八・四一二七）の「許」は「伊」の誤りとするのが通説であるが、来（コ）向（ム）カヒ立チテで、コは連用形の古形とは考えられないであろうか。従って、クの活用は、一段階前には、

コ、コ、ク、クル、クレ・コ

であったと推定される。連用形がコ（ko$_2$）からキ（ki$_1$）へ変ったのは、四段活用に類推されたものであろう。（341頁）

サ変は、ス（為）の一語で、

セ・シ・ス・スル・スレ・セ(ヨ)

と活用する。ところで、このスの連用形も、古くはシではなくて、セではなかったろうか。禁止

の場合にはナ゜セソとなり、助動詞キが接する場合には、シキともなるが、゜セシ・゜セシカともなる。また、命令形がセ（ヨ）であるから、連用形もセせあった方が理屈にあう。従って、一段階前には、

セ・セ・ス・スル・スレ・セ

と活用していたであろう。（342頁）

以上の引用から知られるように、動詞語幹に-i が付されて連用形が生まれたとする大野に対して、山口は「情態言」たる未然形の語尾-a を-i に交替させるか、-a に-i を付加することによって連用形が成立したと考える。また山口は、カ変とサ変の動詞に関して-i の付かない「コ」と「セ」が本来の連用形であり、-i の付く形は四段活用に類推されたものと推定している。

さて、「情態言」なるものが実在したかどうかは大問題であるが、[6] 今はこのことを取り上げるつもりはない。ここで論じなければならないのは、-i の起源である。-i を大野が「切れる形」で「事」を表すとし、山口が「独立化の接辞」としていることは上で見たとおりであるが、-i について両者が思い描いているものはおそらくちがわない。つまり、両者とも連用形の本質は名詞的用法にあると見て、-i をいわば「名詞化接辞」と考えているようである。少なくとも大野が-i をそのようなものと見なしていることは、村山七郎（1979）の以下の言葉からわかる。

> 筆者は終戦後数年たったころ、東京のお茶の水駅近くの道路で大野晋氏と出会い、近くの喫茶店で日本語動詞の活用諸段の成立について、橋本進吉の仮名遣いの研究の立場から意見を述べあい、多くの点で二人の考えが一致しました。二段活用（上二段、下二段）動詞を母音ステムと見る点（幹末母音の質について二人は同じ意見を持っていました）、これに対して四段活用を子音ステムと見る点（連用形から名詞形形成接辞-i を取り除いたもの）、連用形が二段、四段動詞の活用諸段の形成の土台をなしている点、ラ変以外の終止形がウに終わるのは居（ウ）と関係するらしい点、などで一致したのです。これらの一致点は橋本進吉の説から当然出てくるように思われました。昭和二十八年五月二十日の消印の大野晋氏からのはがきには次のように書いてあります。「動詞活用に関して拙文をものしましたのでお送り申上げます。村山さんもほぼ同意見をお持ちであると注記すべきであつたと思ひます。この次に何か書く時には記すつもりでをります」。四段活用子音ステムという点を除けば、そのころの考えが今も正しいと思います。（208頁）

確かに、すべての動詞の連用形は名詞として機能しうる。動詞を名詞化することは動詞の連用形をつくることとほぼ同一である。それゆえ、連用形の名詞的用法は連用形の主要な用法の一つであるといえる。しかし、連用形にはもう一つの重要な用法がある。それは連用形を連用形と呼ばしめている用法、いわば「連なる用法」である。たとえば

「丘にのぼり町を見おろした」という場合、連用形の「のぼり」はここで切れずに、「町を見おろした」につながっていく。この用法は、たとえば「のぼりは苦しいが、くだりは楽だ」という場合の「のぼり」「くだり」とは似ても似つかない。一方は副詞的に機能し、他方は名詞的に機能している。連用形の起源を説いたこれまでの研究は、連用形の名詞的機能に注意を奪われ、その副詞的機能に対する注目を怠ってきたように感じられる。

連用形の名詞的用法にかかわる問題は後の議論に譲ることにしよう。今それを棚上げにして、連用形の副詞的機能に目をやったとき、最初に思い浮かぶのは朝鮮語の副詞化接辞-i である。これと連用接辞-i とは同源ではあるまいか。また、朝鮮語においても古くは-i が連用接辞として用いられたのではあるまいか。このような想定に基づいて朝鮮語を調べてみると、次のことがわかる。朝鮮語にもかつて連用接辞-i が存在した。そして金恩燁（1981）が指摘するように、-i は別の連用接辞と重ねて用いられることもあった。

（４）東京　　明期　　月良　　夜　　入伊　　遊行如可　（処容歌[7]）
toŋkjəŋ　　pʌlki　　tʌlʌj　　pam　　tïl-*i*　　nonitaka
東京の　　明るき　　月に　　夜　　更けて　　遊びに行くと

（５）藪未　　去遣省如（遇賊歌[8]）
sum-*ə -j*　　kakosota
隠れて　　行くなり

（６）衆生 히　罪報　　버새내　　냇다가（『月印釈譜』[9]巻21、116）
čuŋsʌŋhi　　čojpo　　pəs-*a-j*　　najstaka
衆生ら　　罪報を　　脱ぎ　　捨てて

上の（４）の tïl-i は動詞語幹に-i が付いた例であり、（５）の sum-ə-j と（６）の pəs-a-j は連用接辞 ə、a の後に半母音化した-j（＜-i）が付いた例である。なお、-ə と-a は今でも連用接辞として普通に用いられるが、この形態の起源は不明である。[10]

上の引用例における、-i あるいは-j が連用接辞であり、これが副詞化接辞-i と同源であること、またこれが具格接辞 *-ji に溯るものであることは明白である。そしてこの事実は、日本語の連用接辞の-i も同じ具格接辞に由来するものであることを傍証している。ところで、ツングース諸語のいくつかの言語では具格接辞と同形の-ji がある限定された意味を表すための連用接辞として用いられるが、このこともまた連用接辞-i の起源が具格接辞であることを示唆している。次は、J. ベンツィング（1955：123）から引用したエウェン語の例である。

（7）tegenmei-duk　meruŋči-ri-*ji*　haran-duli　nyomačilin
椅子- 奪格　飛ぶ- アオリスト- 連用接辞　部屋- 沿格　駆けはじめた
「（その小さな虎は）椅子から飛びはねて部屋の中を駆けはじめた」

このようにエウェン語では、-ji がアオリストの接辞とともに用いられる。これは日本語の連用形が非常にしばしば「て」（完了を表す助動詞「つ」の連用形に由来する）を伴うことと似た現象である。しかし一方、同じツングース諸語に属するナーナイ語では-ji が動詞語幹に接続する。その実例を田村健一（1996：140）から引用する。

（8）mergen　tetue-i　ačoi-*ji*-i　gese　puǰin-du　buuxeni
勇士　服- 再帰　脱ぐ- 連用接辞- 再帰　すぐに　少女- 与格　与えた
「勇士は自分の服を脱ぐや（それを）少女に与えた」

エウェン語やナーナイ語の連用接辞は、ベンツィングの表現を借りれば、「行為の時間的先行　die Voreitigkeit einer Aktion」を表す。つまり-ji は前節の動詞の表す行為が後節の動詞の表す行為に先立つものであること、簡単にいえば、「～してから」というもっぱら時間的意味を表すのである。このように具格接辞 *-ji に由来すると考えられる形が非常に特殊化した意味を表す例は、朝鮮語やアイヌ語にも見いだされる。朝鮮語で "gan-ji 'orai'o「行ってから久しいです」" などというときの-ji は、エウェン語やナーナイ語の-ji とよく似た意味を表す。一方、節の末尾に付属して副詞節を構成するアイヌ語の-i は、「～したのに」という意味を表す。[11]

アイヌ語の-i を引き合いに出したついでに、'ani という語のことに触れておきたい。'ani というのは日本語の「で」に相当するアイヌ語の具格助詞である。しかしこの 'ani が、カラフトアイヌ語では日本語の「て」（「い」の後では「で」）に相当する連用接続助詞としても用いられる。以下の二つの例文は藤山ハルの語り『'Erum 'Ucaskuma（ねずみの話）1』[12]から引用したものであるが、一方における 'ani は具格助詞として、他方における 'ani は連用接続助詞として用いられている。

（9）suy　ne'an　horokeepo　tani　numateh　ne'an　pohseh　rawta
また　その　だんなさんは　今　起きて　その　ねずみとりを　下に
ranketeh　ne'an　'erum　sitaykike　nii　*'ani*　ne'ampe　sitaykiyke
下ろして　その　ねずみを　叩いて　棒　で　それを　叩いて
tatakiyke　ne'an　'erum　rayki　manuu.
叩いて　その　ねずみを　殺した　とさ

（10）tani　ne'an　mahtekuh　ne'an　pooho　temana　kiikumpehe　nah
今　その　女は　その　子が　どう　するだろうか　と
'eram'an　kusu　hokuhu　ka　'ohta　yee　ka　hankii　*'ani*
心配だった　ので　夫　に　も　言わ　ない　で
sinenehka　pateh　wanteteh　'are'anno　'an.
一人で　ばかり　胸のうちにしまって　そのままで　いた

ところで 'ani という語には、それがカラフトアイヌ語で具格助詞であると同時に連用接辞助詞であるということ以外にも、具格接辞の連用接辞への変化を裏付ける証拠が隠されている。つまり、'ani の成り立ち自体がその変化の傍証として役立つのである。今ここで、'ani がどのように形成されたかを述べてみよう。おそらく、'ani は 'an と-i から成る。'an は今でもそうであるように、「ある」「いる」を表す動詞であったろう。そして-i は、具格接辞に由来する連用接辞であったにちがいない。そこで、'ani はもともと「〜があって」「〜がいて」という意味を表しと考えられる。しかしアイヌ語には主語と目的語を標示する形態が存在しないということも手伝って、'ani は「〜を持って」という意味を表すようになり、さらにこれが「〜を使って」「〜でもって」「〜によって」といった意味に変わったと考えられるのである。ここでいいたいことは要するに、'ani がもともと連用節を導いたということ、そして 'ani にそれができたのは-i が連用接辞であったからだということ、そしてこの-i もおそらくアルタイ系具格接辞 *-ǰi に溯る、ということである。

具格接辞 *-ǰi の連用接辞化に関して、最後に、モンゴル文語の連用接辞に言及しておきたい。下に例示するように、『元朝秘史』では-ǰu、-ǰü という形態がもっとも一般的な連用接辞であった。

（11）basa　tabun　müsüd　qamtu　čuɢla-*ǰu*　quɢuludqun　ke'ē-*ǰü*
また　５本の　矢柄を　一緒に　束ねて　“折りなさい”　といって
ögbe.（『元朝秘史』§19）
与えた

連用接辞が-ǰü になるか-ǰu になるかは、いわゆる母音調和によるものにすぎない。肝心なことは、それらの形態がおそらく具格接辞 *-ǰi に由来するものであるということ、つまり *-ǰi が音声的に弱化して-ǰu、-ǰü が生まれたということである。この推論は、たとえば bitt'ūl-ǰü「順番に」といった様態副詞の語尾に連用接辞と同じ形態が現れるという事実からその裏付けが得られる。

以上、この節ではアルタイ系具格接辞 *-ǰi の連用接辞への変化を跡付けようとした。

古い朝鮮語における連用形接辞-i との比較だけからしても、日本語における連用接辞-i が具格接辞の後裔であることは確実である。

３．主格接辞と主格助詞

本節では、朝鮮語の主格接辞-i と古代日本語の主格助詞「い」を取りあげ、これらもまた具格接辞あるいは具格助詞に由来するものであることを指摘するとともに、主格助詞「い」の歴史と連用形名詞の発達とが深くかかわっていることを論じる。しかしこれらのことを実証的に裏付けるのは、具格接辞の連用接辞化を跡付けることよりもはるかに難しい。というのも、具格と主格とは、また主格助詞と連用形名詞とは、機能上の隔たりが大きく、それらを結ぶ接点が容易に見いださせないからである。

まずはじめに、朝鮮語の主格接辞-i について考える。この接辞の起源を金芳漢（1985）は以下のように説いている。

> アルタイ諸語には固有の主格語尾がないが，韓国語には主格-*i* があって注目を引く。-*i* のほかに-*ka* もあるが、これは-*i* より後で発達したもので，最初は-*i* で統一されていた。ここで問題とするのはもちろん-*i* だけである。
>
> モンゴル語にも固有の主格語尾がないのはもちろんであるが，主語であることを表示しなければ文脈上混乱をきたす場合がある。そのような場合，主語となる単語のあとに *inu, anu*（又は，*ber, bolbasu, bügesü*）を後続させてその単語が主語であることを表示する。（中略）Mo. *inu, anu* は元来三人称代名詞である **i* と **a* の属格形である。この属格形は名詞の後に接辞的に使用され，さらに元来の三人称代名詞属格の意味から虚辞化して，主語表示に転用されたものである。中期韓国語の主題格である-*ʌn* ～ *ïn* は次のような変化の結果と考えられる：**-ínu* ＞ **-ín* ＞ MK. -*ʌn*～*ïn*。そして，三人称代名詞 **i* がチュルク語で所有接尾辞-*i* として接辞のように用いられる如く，韓国語では主語であることを表示するために強調の接辞として使用されているうちに，だんだん主格語尾として固定して行ったものと思われる。（より詳細なことは金芳漢　1965参照）。（186－187頁）

ここで金がいわんとすることを要約すれば以下のようになる。朝鮮語にはかつて３人称単数代名詞の *i があった。これが強調の接辞として主語の後ろに置かれるうちに主語の標識となった。この変化の傍証はモンゴル文語の inu、anu の用法から得られる。inu は３人称単数代名詞 *i の属格形で「彼の」「彼女の」「その」という意味を表したが、これらは名詞の後ろに付属して用いられるうちに虚辞化して主語の標識となった。

この主張の妥当性を検討してみよう。下に、金芳漢（1965：40）が３人称代名詞 *i の主格接辞化を裏付けるためにあげているモンゴル文語の例文を引用する。

（12）Duwa-soqor　aqa　*inu*　dörben　kö'ǖtü　büle'ē.　tedüi̯
ドゥワ・ソコル　兄は　彼の　４人の　子をもって　いた　そのように
atala　Duwa-soqor　aqa　*inu*　ügei̯　boluba.（『元朝秘史』§11）
あるうちに　ドゥワ・ソコル　兄は　彼の　なく　なった

ここには二つの inu が現れている。金によると、一つ目の inu は朝鮮語の ɯn（日本語の「は」に相当する）と同じ機能を果たし、二つ目の inu は朝鮮語の主格接辞 i（日本語の「が」に相当する）と同じ機能を果たしているという。これはしかし、まるで根拠のない見解であるといわざるをえない。inu は両方とも先行文脈に出てくる Dobun-mergen「ドブン・メルゲン」を指す紛れもない代名詞であり、いずれの "Duwa-soqor aqa inu" も「彼の兄、ドゥワ・ソコルは」という意味を表している。ちなみに、『元朝秘史』からの金の引用ははなはだ不正確である。すなわち、金の引用文では二つ目の "Duwa-soqor aqa inu" が "Duwa-soqor inu" となっている。これが単なる誤植にすぎないのか、あるいは金の立論が不正確な引用に基づいて行われているのか不明である。

ここで、問題の inu が主格接辞でないことを示す積極的な証拠を二つあげておきたい。一つは、目的語名詞にも同じ inu が付せられたということである。もう一つは、主語名詞が「私の」ものや「お前の」ものを表す場合には inu ではなくて minu「私の」やčinu「お前の」が用いられたということである。下に、目的語名詞に inu が付属した例をあげておこう。

（13）Dobun-mergen　tere　üge-dür　čö'ē　buGu-yin　öre'ēle　Guya
ドブン・メルゲンは　その　言葉 に　３歳　鹿　の　片方の　後足を
inu　quGuljǔ　ögčü　tere　kö'ǖn-ni　*inu*　abčiraǰu　ger　dotora
その　折って　与え　その 子　を　彼の　つれて来て　家　の中で
ǰaruǰu　aqu　bülü'ē.（『元朝秘史』§16）
使って　いるの　だった

このように『現朝秘史』では inu が純粋な代名詞であったことは明白であるのだが、このことは inu が後の時代においても代名詞のままであり続けたことを意味するものでない。そもそも inu が朝鮮語の助詞 ɯn「は」と同源であるという事実は inu が助詞化する可能性を秘めていたことを意味する。実際、inu は現代モンゴル口語では接尾化して-n となり、「主格接辞らしき機能」を獲得している。しかし-n は主語名詞が３人称に所属するヒト･モノを表す場合にのみ用いられ、主語名詞が１人称や２人称に所属するヒト･モノを表す場合には別の形態が用いられる。

(14) ax-*n* öngöröx üed ter dolōη nastai baisan.
兄- 主格 / 彼の 亡くなった とき 彼は 7 歳 だった
「彼の兄が亡くなったとき、彼は７歳だった」

(15) ax-iig-*aa* öngöröx üed bī dolōη nastai baisan.
兄- 対格- 私の 亡くなった とき 私は 7 歳 だった
「私の兄が亡くなったとき、私は７歳だった」

-n は、inu とはちがって、主語名詞にしか付属しない。この意味において、-n は主格接辞としての機能を備えている。しかし-n は、主語名詞が３人称に属するものを表す場合にしか用いられない。したがって、-n は主格接辞と人称代名詞の役を兼ね備えているといえよう。ところで、モンゴル語には従属節の主語を対格で表すという原則がある。上の(15) に見られる-igg という形態は、まさにその原則に従って現れた対格接辞である。

さて、モンゴル語で人称代名詞の主格接辞化が進行したということは、また朝鮮語の ɯn「は」が人称代名詞の inu に由来するものであるということは、金芳漢の主張する「３人称代名詞 *i ＞主格接辞 i」という変化を裏付けるもののように思われるかもしれない。しかし、*i と inu とは使用法がまるで異なる代名詞であることを見逃してはならない。inu は、上の（12）と（13）に示したように、主語や目的語に後置し付属的に用いられた。それはもともと付属語であったので接辞化することができたのである。一方、*i は主語として、あるいは目的語として単独に用いられた。この相違は無視できない。金芳漢は *i が強意接辞として主語名詞の後ろに置かれたと述べているが、これは単なる仮定である。古い朝鮮語の資料にそのような実例が見いだされるわけではない。*i の主格接辞化が起こったというならば、*i が強意接辞として盛んに用いられていたことを示さなくてはなるまい。

本節のはじめに述べたように、筆者の考えでは、朝鮮語の主格接辞-i は具格接辞の後裔である。この見解を支える論拠の一つは、能格言語における他動詞文主語の特異な形態（すなわち能格）が多くの場合に具格起源だということ、[13] そして朝鮮語の主格接辞-i が具格接辞から生まれた副詞化接辞-i と同形だということである。そしてもう一つの論拠は、自動詞と他動詞との形態的区別の欠如が具格副詞の能格主語化を促したように、朝鮮語における自動詞と他動詞の曖昧な区別が具格接辞-i を主格接辞に押し上げる推進力になったのではないかということである。このような推論が間違っていなければ、主格接辞-i は下に示すような異分析、すなわち自動詞文の他動詞文への変化が発端となって成立したはずである。

トピック主語（ゼロ標識）　＋具格副詞（接辞-i）＋自動詞（ゼロ標識）
↓
トピック目的語（ゼロ標識）＋主格主語（接辞-i）＋他動詞（ゼロ標識）

ここでトピック主語と呼ぶものはトピック化された主語のことであり、トピック目的語と呼ぶものはトピック化された目的語のことである。現代朝鮮語では ɯn「は」という助詞がトピック標識として機能するが、上記の異分析が行われたときには、まだそのような形態は存在しなかったであろう。トピック主語、トピック目的語がゼロ標識であったというのはそういう意味である。しかしトピック標識の有無は、上記の異分析が行われるかどうかということと直接には関係しない。たとえ ɯn のようなトピック標識がすでに存在していたとしても、それは自動詞文の他動詞文化をさえぎる要因とはならなかったはずである。なぜなら、トピック標識というのはある文要素がトピックか否かを標示するものであって、それが主語か否か、目的語か否かを標示するものではないからである。

具格副詞の主格主語化、自動詞文の他動詞文化に対する阻害要因があったとしたら、それは自動詞と他動詞の形態的区別である。動詞の自他が形態的に厳しく区別されていたら、そもそも自動詞文が他動詞文に異分析されることなどありえない。したがって、具格副詞が主格主語に変わったという筆者の想定は、非常に古い段階の朝鮮語では自動詞と他動詞の区別が明確でなかったということを前提としている。[14]自動詞と他動詞がゼロ標識であったというのはそういう意味である。

それにしても、具格副詞の主格主語化はトピック主語をいただく構文でどうして起こったのか。このことを、中国語における類似構文をあげながら説明してみよう。

（16）经过我们二人协商，一致同意离婚。离婚时的财产处理，由我们二人解决。「私たちふたりは協議の末、離婚に一致して同意するにいたりました。離婚時の財産処理は、私たちふたりにて解決いたします。」张贤亮『男人的一半是女人《唯物论者启示录》之一』

中国語には、自動詞と他動詞を区別する特別の標識はない。そればかりか、受動の意味を表すための形態も十分に発達していない。そこで、（16）の「财产处理，由我们二人解决」は、形式だけに注目すれば、二様の解釈が可能である。一つは、「财产处理」が「財産処理は」を意味するトピック主語で、「由我们二人」が「私たち二人によって」を意味する副詞的要素で、「解决」が「解決される」を意味する自動詞である、という解釈である。もう一つは、「财产处理」が「財産処理は」を意味するトピック目的語で、「由我们二人」が「私たち二人が」「私たち二人で」を意味する主語で、「解决」が「解決

する」を意味する他動詞である、という解釈である。文脈を考慮すれば、後者の解釈が妥当であることは明らかだが、このような構文解釈は異分析によってもたらされたものである。すなわち、(16) のような構文はもともと自動詞文であったものが異分析を通じて他動詞文化したものである。中国語の「由」は「〜によって」を意味する介詞（＝前置詞）であるにもかかわらず、(16) では「由」名詞句が他動詞文主語として機能している。この意味において、「由」は主語標識としての役割を果たしている。

朝鮮語の-i も、この「由」のようなものとしてはじまり、それが今あるような主格接辞に発達したのではあるまいか。これを完璧に証明する手立てはないが、このように仮定する以外に主格接辞-i の起源を語る有効な手立てもないのである。しかし、このような仮定は以下の現象を説明するには好都合である。

(17) čowa taroo-ga *tul-iso* kugosul hɛ tuossumnida.
私 太郎が 二人で それを やって おきました
「私と太郎が二人でそれをやっておきました」

(18) čowa taroo-ga *hamkke* kugosul hɛ tuossumnida.
私 太郎が 一緒に それを やって おきました
「私と太郎が一緒にそれをやっておきました」

(19) čohidul *tul-iso* kugosul hɛ tuossumnida.
私たち 二人で それを やって おきました
「私たち二人でそれをやっておきました」

(20) čohidul-i *hamkke* kugosul hɛ tuossumnida.
私たちが 一緒に それを やって おきました
「私たちが一緒にそれをやっておきました」

ここで問題としているのは、主格接辞-i と tul-iso「二人で」、hamkke「一緒に」との共起関係である。主格接辞-ga が tul-iso とも hamkke とも共起できるのに対して、-i は hamkke としか共起できない。これはなぜなのか。それはおそらく、tul-iso の-iso が「具格接辞-i＋強意接辞-so」であることによる。すなわちそれは、具格副詞としての tul-iso を具格副詞に由来する主格接辞と重ねて用いることを避けようとした結果であると考えられる。もちろん、現代朝鮮語の主格接辞-i は具格的意味を有しない。しかし、かつてはそのような意味を保っていたはずである。(19) のような表現は、その当時の表現が継承されてきたものと見なすべきであろう。

さて、ほとんど推測でしか起源を語れないのは古代日本語の主格助詞「い」についても同様である。「い」には主格助詞からはみでる用法があったために、それを強意的な副助詞として一括する向きもあるが、少なくとも以下にあげるような「い」は朝鮮語の-i

と同源の主格助詞と見なすのが自然である。

（21）我が背子が跡踏み求め追ひ行かば紀の関守い留めなむかも（『万葉集』巻４、545）.

（22）……妹が去ぬれば　血沼男　その夜夢に見　取り続き　追ひ行きければ　後れたる　菟原男い　天仰ぎ　叫びおらび　足ずりし（『万葉集』巻９、1809）.

（23）うらぶれてかれにし袖をまたまかば過ぎにし恋い乱れ来むかも(『万葉集』巻12、2927）.

（24）筑波嶺のをてもこのもに守部すゑ母い守れども魂ぞ会ひにける(『万葉集』巻14、3393）.

古代日本語の主格助詞「い」と朝鮮語の主格接辞-i が同源であるとして、それは独立に発達したのだろうか。あるいは、朝鮮語の-i の用法が日本語に移入されたのだろうか。R. A. ミラー（1971）は、「い」が仏典の訓読文によく現れることを根拠に、それを朝鮮語からの借用と見なしている。しかし、これは主格助詞だけを特別扱いした見方である。動詞の連用接辞-i が朝鮮語の借用でないことは明らかであるから、主格助詞「い」も借用によるものでないと見るべきである。「い」がしばしば仏典に用いられたのは、もちろん朝鮮語の影響も無視できないが、日本語に「い」を主格助詞として用いる慣わしがあったからにちがいない。それにしても、「い」の使用がとくに仏典において目立つとすれば、それは「い」が「が」に押しやられて古態となり、その古態性が伝統を重んずる仏典訓読で好まれたからであろう。『万葉集』に散見される主格助詞「い」も、当然のことながら、古態表現と見るべきものである。

ところで、主格助詞「い」の前身は具格助詞であったと考える。また、「い」の具格助詞から主格助詞への変化は、朝鮮語の具格接辞-i の主格接辞への変化と同じ過程を経たものと考える。したがって、この想定は日本語の動詞もかつて自他の区別が曖昧であったことを前提にしている。[15] そしてもちろん、「い」が具格接辞として多用されていたことを前提にしている。しかし、「い」の具格用法はすでに奈良朝時代の日本語において廃用となっていたようである。というのも、長歌の一節における以下の実例を除いて、「い」の具格用法を文献の中にまったく見いだせないからである。

（25）みつみつし　久米の子が　頭推い　石推いもち　撃ちてし止まむ　みつみつし　久米の子等が　頭推い　石推いもち　今撃たらば良らし（『古事記』中、神武）

この「い」を筆者は、歌謡の中に生き残った遺物としての具格助詞と見たい。すなわち、これはかつて広く用いられた具格助詞「い」の残滓であり、「頭推い　石推いもち」

は「頭推(くぶつつ)で、石推(いしつつ)でもって」を意味している、と考えたい。ちなみに、「もち」というのは動詞「もつ」の連用形が具格助詞化したもので、「早帰り来(こ)とま袖持ち涙をのごひむせびつつ」（『万葉集』巻20、4398）のように道具・手段を表すのによく用いられた。これを具格助詞「い」の後ろに付加して具格的意味の強化をはかったと見なすのはきわめて自然なことである。[16]

しかし過去の研究者たちは、古代語助詞「い」を朝鮮語の主格接辞-i と比較することはあっても、「い」と具格接辞 *-ji との関連を想像すらしなかった。そこで、上に引用した「い」について種々の解釈がなされてきた。古くは本居宣長が『古事記伝』で、「頭推(くぶつつ)」「石推(いしつつ)」のことが上代では「頭推い(くぶつつい)」「石推い(いしつつい)」ともいわれたか、歌の調子を整えるために「い」が付加された、という考えを示した。これに対して伊波普猷（1935）は、それを格助詞「を」の代理をつとめる係助詞にちがいないと断定した。また中島利一郎（1941）は、それが「を」に相当する格助詞であるとした。さらに石原六三（1950）は、それが間投助詞的用法として強意の意味を表していると述べた。これらのいずれの意見にも筆者は賛成しない。

主格助詞「い」に関しては、それが何から生まれたかということだけではなく、それが何を生みだしたかということも重大な問題である。石原六三（1950）は、泉井久之助（1939）の「しかしこの主格の助詞とせられる『い』は或いは本来、指示代名詞として『それ』などにあたる意味を持っていたのかも分らない」という主張を取り入れて、たとえば「紀の関守い」は「紀の関守それが＝その人が」であったと推定しているが、事実はむしろ逆である。すなわち、主格用法から代名詞の用法が生まれたと見なさなければならないのである。しかしこの問題は後の稿に議論を譲ることにして、ここでは主格用法から派生した三つの用法に触れておく。一つは「い」のトピック標識としての用法、もう一つは「い」の間投助詞的用法である。そしてもう一つは、「い」が「ヒト・モノ・コト・サマ・トコロ」を表す用法である。これは連用形名詞がいかに形成されたかという問題と深くかかわっている。

主格助詞「い」は、最初は「が」と同様に、トピック化されていない主語に付くものであった。しかし、やがってトピック化された主語にも付されるようになった。こうして「い」は、「は」と同じ機能をも獲得した。次の例における「い」は、格助詞「と」と一緒になって「とは」という意味を表している。

（26）我等四王と及無量百千の神と并せて国土を護る諸の旧の善神とい遠離して去らむ時には、是等の如き無量百千の安怙悪事を生ぜむ（『西本願寺本金光明最勝王経平安初期点』）

「い」が主語標識でありながら、また一方でトピック標識であったということは、「い」

の機能を曖昧にした。その結果、「い」の後に「は」を付加する用法が生まれた。

（27）いなと言えど語れ語れとのらせこそ志斐いは申せ強ひ語りとのる（『万葉集』巻３、237）

「いは」というのは、はじめはトピック標識を二つ重ねたものであったろう。しかし、トピック標識としての役割は「は」が全面的に引き受けることになり、「い」は別のものに変容した。たとえば上の「し志い斐いは」についていうと、「い」はすでに強意的な意味を表す間投助詞として機能していたかもしれない。

ところで、「いは」の「い」がすべて間投助詞になったわけではない。「い」が動詞に付属した場合、それは間投助詞とは異なるものになった。

（28）此を持いは称を到し、拾いは謗を招きつ（『続紀宣命』）

（29）此の経を一たび読まむいは菩提の心を発して（『金剛般若経』）

これらの例において、「い」は連体形に接続して、「ヒト・モノ」という意味を表している。「い」にこのような意味が生まれた理由の一つとして、トピック標識の機能を「は」が一手に引き受けるようになったことがあげられる。しかしその決定的な理由としてあげなければならないのは、連体形に次の二つの用法があったという事実である。一つは名詞をまさに連体修飾する用法であり、もう一つは連体形それ自体を名詞的に用いる用法である。後者の例を下に示してみよう。

（30）防人に行くは誰が背と問ふ人を見るがともしさ物思ひもせず（『万葉集』巻20、4425）

この例における「行く」は「行くヒト」を、「見る」は「見るコト」を表している。上の（28）や（29）におけるような連体形も元来は「〜するヒト・モノ・コト・サマ・トコロ」を表していたが、異分析を受けて「い」の連体修飾語になった。つまり、「ヒト・モノ・コト・サマ・トコロ」の意味を連体形に代わって「い」が担うようになったのである。これが名詞としての「い」の起源である。

上述の変化には、連用形名詞の起源の謎を解く鍵が隠されている。一説によれば、連体形は未然形・連用形・終止形よりも新しい活用形である。連体形がまだ成立していなかったとき、後の時代に連体形が担うようになった役割はおそらく動詞語幹が受け持っていた。そしておそらく、連体形と「い」との間にあったのと同じ関係が動詞語幹と「い」との間にもあり、連体形に付属する「い」に起こったのと同じ変化が動詞語幹に付属する「い」にも起こった。朝鮮語において名詞化接辞-i が動詞語幹および形容詞語幹に付せられるという事実は、それと平行的な現象と見なすべきである。[17]

ところで、「動詞語幹＋-i」というのは動詞の連用形と形が同じであった。あるいは、形が同じになった。そこで、主格助詞に由来する「い」が「ヒト・モノ・コト・サマ・トコロ」を表すようになったということは、動詞の連用形が「～するヒト・モノ・コト・サマ・トコロ」を表すようになったことと同じ結果をもたらした。こうして連用形名詞と呼びうるものが生まれた。それは連用形そのものが生みだした用法ではなく、連用形と同じ形から生まれた用法を連用形が取り込んだものである。このように考えなければ、同じ連用形が一方において副詞的に働き、他方において名詞として機能することを首尾よく説明することはできない。

謝辞：この論文を執筆するにあたり、多くの方々のお世話になった。現代韓国語の文法について御教示を賜った名古屋大学言語文化部の飯田秀敏教授、および名古屋大学院国際言語文化研究科の宋正植くん、任炫樹さん、崔允娥さんらの大学院生諸氏に対し、また現代モンゴル語文法についての煩わしい質問に心よく答えてくださった研究生のドルゴルスレン・サイニャムブーさんに対して感謝の気持ちでいっぱいである。

注

1　もっともツングース諸語では、満州語をも含めて、経由の意味は一般に沿格によって表される。

2　元の太祖・太宗ニ朝の実録で、編者・編年は不明。モンゴル語文の原典は伝わらず、漢字による音訳がある。本稿における引用は小沢重男（1984・1985・1986）に拠った。

3　郷歌（ヒャンガ）と呼ばれる新羅の歌謡の一つで、真平王代（579－631年）に作られたもの。漢字の音と訓を借りて表記された。原文は李民樹（1994）に拠り、発音表記は金思燁（1981）に準拠した。

4　村山七郎（1979：223－229）は、日本語の動詞の中でもっとも勢力のある四段活用の動詞が子音語幹であったという説に異論を唱えている。村山によれば、たとえば「曲がる」の語幹は mãga-（＜ *maŋga-）であり、これに-ri が付いて連用形が成立したという。仮にこれが事実であるとして、-ri は-i とどう異なるのか。-r は単なる連結子音なのか。このことについて村山は何も語っていない。

5　「被覆形」とは常に他の形態と結合して現れる形態のこと、「露出形」とは単独に現れうる形態のことである。そこで、未然形は「被覆形」、未然形以外は「露出形」と見なされる。

6　清瀬義三郎則府（1991）は、日本語の動詞に「活用」なるものは存在しないという立場に立ち、「情態言（＝未然形）」の存在を認めない。清瀬は次のように断言する。

> 動作動詞の「咲く」を例に採れば，「未然形」は「saka」の如く～ a の形を取るが，「これは阪倉篤義氏や北原保雄氏などのいうように，『情態言』としてとらえたい」旨を山口氏は述べられる。しかし， 形態論的に見て，「未然形」なる「活用形」は存在しない。動詞語幹 sak- に続く a とは，連結母音 a を持つ接尾辞（- (a) m-, -*(a) simë-, - (a) z, - (a) n, - (a) ba など）

の結合に伴つて顕れる連結母音 a（例へば、ask-am-）か、あるいは連結子音の直後に a を持つ接尾辞（-* (r) arë-, -* (s) asë-, -ᵘ (r) aku など）の結合に伴ひ、連結子音の潜在した際の頭母音の a（例へば，sak-arë-）かの何らかであつて、形態素的に saka- なる「活用形」は無いのである。（111－112頁）

未然形の-a が清瀬のいうような連結母音であるにしても、連用形の-i は、決して連結母音ではない。それは後述するのように、「しかるべき意味」をもって付せられたものである。それゆえ、日本語の動詞に「活用形」を一切認めない清瀬の考えには賛成しかねる。

7　郷歌（ヒャンガ）の一つで、西暦879年の作。原文は李民樹（1994）に拠り、発音表記は金思燁（1981）に準拠した。

8　郷歌（ヒャンガ）の一つで、元聖王代（785－789）の作。原文は李民樹（1994）に拠り、発音表記は金思燁（1981）に準拠した。

9　李朝時代の1447年に刊行された書物。原文、発音表記とも、金思燁（1981）に拠った。

10　日本語の「連用形＋て」の「て」に相当するものとしてアイヌ語に ŭa という形態があるが、これと朝鮮語の-a､-ə とは同源であるかもしれない。

11　知里真志保（1974：48）によると、この用法の-i は母音のあとで-hi とも響くという。

12　村崎恭子（1976）に収録されている。

13　このことについては、拙論「能格的なものの発展をめぐって（１）－（９）」（『言語文化論集』第 XVI 巻第１号-XXII 巻第１号、名古屋大学言語文化部・国際言語文化研究化、1994－2000）、および拙論「能格の二つの成り立ち（『ことばの科学』第13号、名古屋大学言語文化部言語文化研究会、2000）において詳しく論じた。

14　金思燁（1981）によれば、古代・中世朝鮮語では使役と受動が同じ形で表されたという。これは、自動詞と他動詞を厳密に区別しなかったことの表れであるといえるかもしれない。現代朝鮮語でも､たとえばčuk-「死ぬ」に-i を付加したčuk-i- は「殺す」という意味の使役態になり､čap-「捕える」に同じ-i を付加したčap-i- は「捕えられる」という意味の受動態になる。ところで、日本語の「れる・られる」が一方で尊敬と可能の意味を表し、他方で受動の意味を表すという事実は、日本語でも自動詞文と他動詞文の区別が明確でなかったことを示唆している。

15　動詞における自他の区別は、はじめから存在したものではなく、ある時代に成立したものである。釘貫享（1996）は、奈良朝時代の日本語における自動詞と他動詞の対応形式に次の三つの種類があったことを指摘している。

Ⅰ　活用の種類のちがいによるもの
　例：知る（四段、自動詞）― 知る（下ニ段、他動詞）
Ⅱ　語尾の種類のちがいによるもの
　例：成る（自動詞）― 成す（他動詞）
Ⅲ　語幹増加と語尾付接によるもの
　例：荒る（自動詞）― 荒らす（他動詞）

このように分類したうえで、釘貫は「これらの形式が、自他弁別の要求の増大に対応して、それぞれ異なった通時的段階において成立したものであると考える」（308頁）と述べている。また、三つの形式の質的側面にも言及して、「これを歴史的な軸において考慮すると、要するに自他対応が活用の種類の違いのみに基づく消極的なものから、『ル』『ス』という積極的な標識を用いた形式へと転換を遂げたのではないかと疑われるのである」（308頁）と述べている。

16 「いもち」はモンゴル語文語の具格接辞-iyar/-iyer を想起させる。これらはおそらく、所有動詞に由来する-ɢar を-i に付加することによって生まれた形態である。

17 ちなみに、朝鮮語においてもčar-i「寝るトコロ＝寝所・座席」や kan-nan-i を「今生まれたヒト＝産子（うぶこ）」のような「連体形＋-i」に由来する名詞が存在する。ただし、現代朝鮮語話者はこれらをもはや派生名詞として意識していないようである。

引用文献

李　民樹　옮긴이　이민수（1994）『삼국유사（三國遺事）』ソウル：을유문화사.

石原六三（1950）「古代日本語の格助詞と称せられる『イ』と朝鮮語の格助詞『이 i』に就いて」『天理大学学報』（天理大学人文学会）第二輯：17－33.

泉井久之助（1939）『言語の構造』紀伊国屋書店（改訂増補版、1967年）

伊波普猷（1935）「おもろの研究より－古代国語の助詞『い』の用法の瞥見－」『沖縄日報』（服部四郎ほか編『伊波普猷全集』第六巻：421－461. 平凡社、1975）.

大野晋（1953）「日本語の動詞の活用形の起源について」『國語と國文学』第30巻第６号：47－56.

－－－（1982）『仮名遣と上代語』岩波書店.

小沢重男（1984・1985・1986）『元朝秘史全釈（上・中・下）』風間書房.

川端善明（1978・1979）『活用の研究Ⅰ・Ⅱ』大修館書店.

北原保雄（1970）「『む』はなぜ未然形につくのか」『月刊文法』第２巻第８号：17－24.

金恩燁（1981）『古代朝鮮語と日本語』六興出版.

金芳漢（1965）「國語主格語尾『이』考再論」『學術院論文集』人文・社會科學篇第五輯：32－61.

－－－（1985）『韓国語の系統』（村山七郎・大林直樹訳）三一書房.

清瀬義三郎則府（1991）『日本語學とアルタイ語學』明治書院.

釘貫享（1996）『古代日本語の形態変化』和泉書院.

阪倉篤義（1961）「古代日本語における名詞の構成」『國語國文』第30巻第11号.

田村健一（1996）"Die elativische Funktion des tungusischen Instrumentals ― Unter besonderer Berücksichtigung des Nanai―"『名城商学』第45巻別冊：137－151.

知里真志保（1974）『知里真志保著作集』第４巻　平凡社.

中鳥利一郎（1941）『東洋言語學の建設』古今書院.

ベンツィング Benzing, J (1955) *Lamutische Grammatik*. Wiesbaden: Franz Steiner verlag.

馬淵和夫（1968）『上代のことば』至文堂.

ミラー Miller R.A. *Japanese and the other Altaic languages*. Chicago:The University of Chicago Press.（西田龍雄監訳『日本語とアルタイ諸語』大修館書店、1981）.

村崎恭子（1976）『カラフトアイヌ語』国書刊行会.

村山七郎（1979）『日本語の誕生』筑摩書房.

山口佳紀（1985）『古代日本語文法の成立の研究』有精堂.